

環白山麓帯の生活文化におけるアニマル・ロアの地域比較

広瀬 鎮 名古屋学院大学
藤田 喜作 鳥越村教育委員会

ON COMPARISON OF DISTRICT ANIMAL LORE OF LIFE HISTORY AND CULTURE IN HAKUSAN MOUNTAIN FOOT REGION IN ISHIKAWA PREFECTURE.

Shizumu HIROSE, *Nagoyagakuin University*
Kisaku FUJITA, *Torigoemura Education Committee*

はじめに

石川県石川郡鳥越村住民間にみられる自然認識を調査する村落毎のアンケート調査の進展と平行してインフォーマント個々の聞き取りを継続したが、1987年7月、渡津地区のインフォーマントM、神子清水地区インフォーマントNから、地元学校教育に係わる環境学習の過去の実態調査における両インフォーマントからの自然および動物に関する聞き取り情報は、地区住民の環境観や、環境の変化を考察する上での分析尺度となりうるものであった。人々の幼年期から成人にいたる間住民個々の成長をインフォーマントたちはよく観察していた。

とくに鳥越村内での環境変化を具体的に記憶し、それに係わった生きものたちの関心が語られたので、アニマル・ロアの地域ごとの特性をすることができたことは幸いである。

例えば、渡津地区でニホンザルは村内で良く思われておらなかった。過去に左礫地区までやってきたサルも渡津地区へは最近までやってこなかった。しかしながら、サルの嫌悪観のみが継承されていて消えることがない。そのことは、反対に手取川をへだてた吉野谷村の下吉野地区では、ニホンザルへの関心はきわめて低く、1980年代の調査では、カモシカ・アナグマその他小動物の出現と作害があげられていた鳥越村に比して、野生動物による作害が問題化してきたのは、下吉野地区においては1989年からであった。

住民にとっての自然への強い認識は、河川の氾濫などによって引きおこされた水害等をめぐって深く形成されていて、インフォーマントNは1934年以降の村人の河川災害への関心の高まりについてとりあげていたのである。

しかしながら、下吉野地区住民の川への関心は川の氾濫・洪水ではなく、川での水難が中心であった、生活文化観の相違が明らかに地域の環境のちがいに形成されてきたことが伺えるのである。

鳥越村の環境教育と住民の自然認識

石川郡鳥越村、藤田喜作氏（教育長）によって、学校教育の場における児童生徒たちの自然や環境をめぐる学校教育での教育対応についての知見をえたが、本論調査のごとく長年教育現場にあって定年退職せるインフォーマントを通じて明かとなった学校外学習の持つ有効性は、特筆せねばならないといえよう（図1）。すでに、「石川県石川郡手取川流域村落にみられた住民の自然認識(1)」におい

て、鳥越村の近代化と住民意識の変化をめぐって地域住民の生活文化における自然認識と学校教育の係わりについて触れたが(広瀬, 1988), 大日川流域住民にとっての大日川環境の変化とその評価には、著しく少年期以降の社会内での個々住民の成長と発達のライフ・ヒストリーに影響を受けていたのである(図2)。

筆者は、鳥越村の自然認識に係わる動物伝承をめぐり、村内環境の変化に係わる動物ごとの動物消

学校名	教員数	児童生徒数			規模
		男	女	計	
鳥越小学校	13(1)	140	137	277	鉄筋コンクリート3階建、校舎、体育館鉄骨(一部鉄筋)造平家建(一部2階)屋外プール25×15m 校地面積19,626m ²
鳥越中学校	10	75	66	141	鉄筋コンクリート3階建、校舎、体育館、屋外プール25×15m 校地面積28,501m ²

()は講師

図1 鳥越村小中学校の実態(1983年4月1日現在)
1984年鳥越村勢要覧より

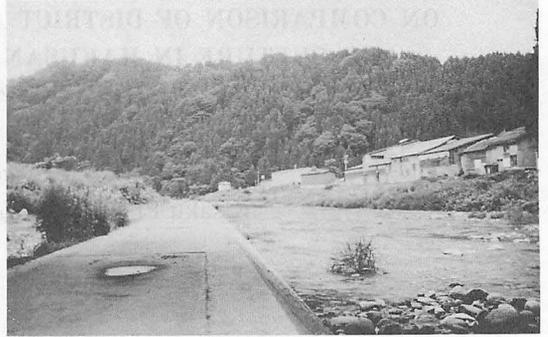


図2 大日川流域の景観(別宮地区付近)
地域の子供たちの成長と共に河川の変貌があった

長を分析中であるが、サル、クマ、タヌキ、キツネ、アナグマ、イタチ、テン等の各種動物は、住民の居住動態の変化とともにタヌキ・アナグマのごとく、人の住む地域内への進出がめだつものも現れて、住民間の生活話題の変化もおこってきている。

鳥越村ではすでに、1984年中央大学民俗研究会による「石川県石川郡鳥越村調査報告書第22号1984」が、口承文芸として昔話、伝説、言い伝え、歌謡、なぞなぞ(あかしもん)等を収録している。サル、キツネ、ホトトギス、トンビ、イヌ、テング、ゴット(ガマ)、カニ、ハチ、タヌキ、キジ、ツル、ウマ、カラス、スズメ等の生きものが、登場してくるが、今日では、空想の生きものをのぞいて、鳥越地区では家畜のウマもほとんど見かけることがなくなっている。キツネ、ヘビは地域の近代化と共にその姿を消し、その伝承性が強まってきているのであるが、釜清水在の鈴木勝弥氏(当時78歳)の語る「送り犬」伝承は、オオカミや野犬とヒトとの関係にみられた危険意識をよくとらえている。

“犬がホソグイ(細越)の手前の所でまっぴりして次の部落まで後をついてくる。危害を加えられないように、人は歩くときに縄を腰につけて引っ張っていく。犬は縄に仕掛けがあるとと思うのか、縄をつけていると不思議に近づいて来ない。だから村の人はみんな夜歩く時は、腰に縄をつけて歩いた(図3)。

このことは、人々の昔の生活の知恵を語りかけてくれるのであり、野生動物との対応や動物観がよく伝えられていると考えている。鳥越村にはキツネの伝承が昔話の中には多く語られているが、オオカミやミズシ、テングの伝承は、手取川対岸の下吉野地区ほどには聞きとられていない点は注目されてもよいと考える。

また、動物観を見事にあらわしている伝承例に出合ったので、ウマをめぐる人びとの気持ちについて以下にあげておこう。

これは、広瀬の瀧下宗興吉談として記録されたものであり「馬助殺し」という伝承である。“馬助という人が、広瀬の田の中の小松に通じる道を馬に荷をつけて売りに行った。荷が全部売れたので、空になった馬の背に自分が乗って帰ってきて、山を降りた所の川瀬で水を飲もうとした。すると馬に殺

されてしまった。帰りには何も背負わずに空なら馬も喜んだのに、馬を大事にしないで乗ってきてしまったから、馬が怒ったのだろう。”以後、その場所を「馬助殺し」と言う。馬をいたわらぬ者が、馬にしかえしをされた。そして「馬をいたわる心」を教訓としてこの伝承が伝えている。このように家畜動物に対して寄せられた人々の思いについては、こうした動物伝承が継承されている地域の人々に共通した家畜認識がそこに存在していたと考えているものである。

大日川流域住民のなかに、川に対する恐れや認識のあることはすでに述べたが（広瀬, 1988), 古くからの自然畏敬や生き物に霊を感じる生活態度は、聞き取りを行った個々のインフォーマントの心の中に生きつづけていた。鳥越村内の手取川に沿った河原山のK（インフォーマント）は、クマを“こわい”動物として認識していた。しかしながらインフォーマントMはむしろトカゲ、ムカデのほうがおそろしいのである。鳥越村での聞き取りの中心となったインフォーマントは元教員であり、環境知識や動物への関心は職業柄高い存在であり、住民の少年期からの動物観や自然観につよい働きかけをしていたこともわかってきた。

だが、学校教育の場も、地域の現代化、近代化と共に変化をきたし、年々人工・世帯数の減少傾向にあった鳥越村における専兼業別農家数の年々の変化をみると、1975年以後急速に第2種兼業農家が増加するのであるが、農耕者の兼業化は環境そのものの変化を示しているのである。

元教育者であるインフォーマントたちの記憶の中にある半世紀以上も前の鳥越村の児童生徒達の自然接触の様子は今日の子供達の遊び不在の生活では今となってはとうてい想像もつかぬのではないかと語っている。子供達の生活は、草刈りや薪取りなどの労働量が多く、子供は屋外での労働の間をみつめて遊んでいたのである。身のまわりの自然の理解はきわめて生活の維持の上で有効であった。教師も生徒も“神子清水は川の合流点で危険な場所であるが、だからこそ作物がよくできるのだ”あるいは“柳原は煙草をつくってきたが、山の上までもよく日があつた。だからタバコづくりには良かった。”等自然環境をめぐる自然認識や自然知識は、日常生活の中で豊かに継承されていたのである（図4）。

住民にとっての環境の記憶は文書に記され、記録されたものではないが、過去の地域環境を考察する上で、貴重な手掛りともなる証言なのであり、その価値性は高いものと言わざるをえないのである。

鳥越の自然への思い

本調査のインフォーマントが述べているごとく、鳥越村における多くの大人達が、子供の頃体験した学校と家との間の通学道は、野生の動・植物や昆虫等との接触の場であった。これらが今日、



図3 古伝承を語る鈴木勝弥氏（釜清水）

左 鈴木勝弥氏
右 沼尾周一氏

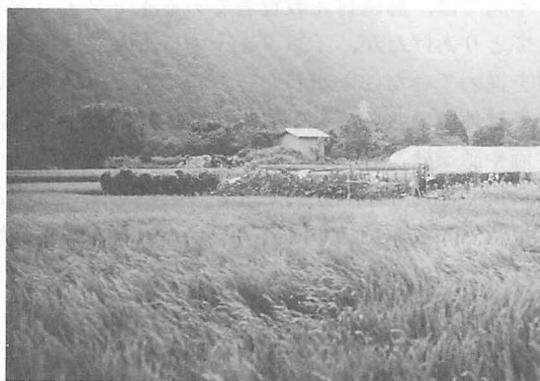


図4 鳥越村の田と鳥の景観

子供たちが畦であそぶ姿はついぞみかけられなくなった

現代化された生活の中に全く忘れ去られているわけではない。インフォーマントNによれば、各村落にはそれぞれ性格があり、川沿いにことなっているという意見が述べられているのであるが、川にそった地域の人々の自然への思い、具体的な環境認識はあまり大差がない。だが、大日川とことなっており、手取川流域の村落および、吉野谷村下吉野地区では同じように「荒れる」川でありながら、住民の抱く「恐れ」の感情は大きくことなっているのである。

インフォーマントは、すべて現在の子供達の自然接触の乏しさにある種の危機を感じている。それは一方において人々の環境への無関心を誘発してしまうのであるが、本調査において聞き取りを通じて、意識されていたのは学校と村の生活との共存、学校が地域社会内での期待された存在となっていた点である。これまでの調査で、渡津地区では野生動物の行動についてかなり丹念に関心が寄せられており、ノウサギ等の食用習慣が伝わっている。したがって生物の資源化、食用化についての関心が高く、何かの形で動物および自然との接触が幅ひろく、今日でも継承されて、日々話題となっている。

面接した鳥越地区の元教育関係者の自然環境の証言ともいうべき発話のなかで、1986年9月8日の聞き取りにおいて明治44年生まれのインフォーマントHは、今日の子供達の遊び、自然接触の乏しさを問題視している。そして、環境教育の中心は家族教育であることを力説している。現在までに社会集団の内に形成された知恵の収録は、必ずしも進んでいるとは考えられないのであるが、インフォーマントたちが鳥越村側からみて、“吉野の山の谷に雪がある時は、アツオロシ”という気象俚語が伝承されていてこれが、種まきに大きく関わっていたのである。「アツオロシ」とは、「種を深くまいておく」ことであるが、作物の育成のための配慮が、対岸の山の残雪の程度によって予測されてきたのである。

インフォーマントHの発話にみたこのように継承された俚語は、インフォーマントが学校教育者であったこともあり、地域における自然と生活をむすびつける環境認識として評価しうる情報となっているのであって、地域の自然認識の一つでもあった。今日、このような地域の環境情報は、伝承として数多く残されており“上野村の清水はわるい”、“〇〇のスイカはタヌキに盗まれるが味がいいからだ。”“Tばあさんところのネコの目は時計がわりになる”“白山(しらやま)の夕日は駄目”など現代口承は人々の日常生活のなかで語られ、伝えられ、あるものは長く記憶されているのである。今日、各地域ごとにみられた世代間、生業間、性別、ライフ・ヒストリーの形成などを通じて、判明してきたアニマル・ロア(動物伝承)を今後は地域における自然認識と係わって分析する予定である。

本論では、鳥越村元教育者であるインフォーマント間に現れた自然認識をアニマル・ロアを中心としてとりあげたが、インフォーマントたちは実践をふまえ、住民の日常生活の充実と係わって生活学習を進めていたことがわかったのである(広瀬, 1988)。

鳥越地区においても手取川流域住民間の手取川に対するとらえ方は、大日川流域の生活者とは川の評価や認識はことなっている。手取川上流域の三ッ屋野のインフォーマントSは川に恐れを感じており、川や池に「主」がいたという昔話を聞いたことがあるといい、同インフォーマントは川の汚染は“生活水の放水であると考えている。だが川への恐れに比してこのインフォーマントは、雪に対する恐れはきわめて乏しい(広瀬, 1988)。

すでに筆者は手取川流域民の自然認識については「中部山村社会における猿の民俗(3)(名古屋学院大学論集, vol.25, No.1 1988, P.14-P.44)」において、自然観と環境認識についてのべているが、自然の生きものや自然に対しては、それが利用のための生活態度の強い環境対応に接することが多く、それらを資源性文化認識とその傾向をとらえているものである。

インフォーマントの発話資料の収集とその分析によって、話者自体のすごした地域の自然環境がい

かにインフォーマント日常生活において係わっていたかクローズアップされてくるのであるが、個々の生活体験や日常生活での学習は的確な自然認識となって維持されている点を明らかにして行かねばならないと考えている。また、一生を通じて体験する自然対応は、社会環境への適応とも深く係わってくる。特に多くのインフォーマントの多量の口述資料の収集分析以上に小人数者からの多様な発話情報の精密分析は、地域の住民意識を知る上で重要ではないかと考えているものである。

下吉野地区住民にみられる自然観

下吉野地区住民の聞き取りは、大半が亀寿会図5)メンバーからであるが、聞き取り対象者は、高齢者からさらに年齢の低い層へとその幅が広がりつつある。また、鳥越地区における釜清水北地域の家族集団における住環境と自然対応の歴史、動物知識、環境の利用調査がすすめられているのと対照的に下吉野地区においても家族集団を対象とした調査がすすめられている。自然観調査もある特定の年齢に片寄ることなく、家族の各世代層を対象とした調査になってきているのである(広瀬, 1987)。

しかしながら野生動物との出会い接触の記録化をはじめてみると、近年までの野生との接触は乏しい。それが、最近になって下吉野地区もまた、野生動物の出現が日常会話のうちにみられるようになってきている。1975年の調査報告の段階では、吉野谷村内での野生ニホンザルとの出会いは昭和晩期、大正晩・初期であり、中宮、蛇谷、瀬波があげられていて、下吉野地区での出会い例はみられない。

(広瀬, 1975)しかしながら、下吉野地区にみられない「猿鏡」伝説が残されている。(広瀬, 1981)いわば、文化伝承とも考えられるこの伝説の存在は、同地区の社会発展と無関係ではないのである。

下吉野のあたりは、安宅夏夫氏によると(吉野谷村物語, 1984 吉野谷村)“十景に加えて名勝旧跡が多く、国道沿いにある国指定天然記念物の御仏供杉の巨姿に瞑目し、史書『宝永誌』には祇院寺の泉水とある。沼沢地小豆沢の文字通りあずき色の小石の輝きにも心ひかれて、しばしたたずんだ。”とある。

下吉野遺跡の水田から打石斧が発見されたことは、この地に古くから古代人の生活していたことを伺わせるのであるが、吉野谷村歴史年表によれば、1792年矢田広寛の吉野十景遊覧図記にいたるまで、特記されるべき事象がみあたらない。1933年、下・上吉野に無限責任信用販売購買所の合併、1972年吉野十景雲龍山遊歩道整備事業、1,300坪着手、1978年上・下吉野両地区生活改善センター完成、1989年吉野工芸の里産業情報センター設置にいたる、地区住民の生活と直接的、間接的に係わった文化事業が営まれてきた。

このなかにあって1979年9月、上・下吉野両地区生活改善センターの完成は生活、文化をとらえるうえで重要な文化施設の開設となる。

本論の高齢者からの多くの自然認識に係わる生活情報は、新設された高齢者福祉センター施設において収録されたものが多くを占めている。

1988年の調査においてインフォーマントTs(85歳)、インフォーマントY(80歳)、インフォーマントN(81歳)、インフォーマントNH(69歳)の4名から得た下吉野地区の伝承には、ヘビ、テング、



図5 亀寿会の会員 吉野谷村
(吉野谷村 下吉野地区
高齢社福祉センターにて)

カメなどの妖怪に係わったものが多くあらわれた。インフォーマントO(82歳)は、古伝承のなかに“子供の育たない場所が伝承されていて、土地替えのされた言い伝えを口述している。この願慶寺にまつわる昔話には土地の環境と生きもの(ヘビ)に係わる話題が残されていて、禁忌等精神文化に係わる特色が濃厚にみられており、古伝承継承度の高さをみとめざるをえない。もっとも伝承者は69歳のインフォーマントをのぞいて、3名は80歳をこえるものであった。「テングカベ」などの地名には“山の危険”が意味としてかくされていると伝えてくれた。これらインフォーマントたちの語る言い伝えの詳細な記録化は、亀寿会において別にまとめられる予定であるが、上述のようにインフォーマントNの“ヒキガエル(ゴト)がいると子供がひきつけをおこす。そのため子供が育たなかったのだ”という伝承は自然環境評価のあらわれでもあったと考察するものである。

手取川に接した下吉野地区に川と係わった妖獣ミズシの登場は、今日の代表的地区伝承でもあるのだが、直接的に環境を指標するものとはいえないのである(図6)。

話者であるインフォーマントたちの伝承のうちに登場する生きもの自然環境の係わり方には、下吉野の地勢と社会発展とむすびついた文化としての自然認識がみい出されているのである。

伝承の収録を通じて明かとなってきた、地域内における地形認識とその評価に関しては歴史的過程における住民個々の生活対応が絶えず深く係わっており、継承される土地に対する思い入れは、今日なおその意味を充二分に考察する必要のあるものと考えている。

当然、そこに生息する生きものと係わって自然環境の特性は理解されている。ヒキガエルのあらわれる地域とミズシのとりあげられる地域とは、人々の生活上の評価も大いにことなっているのである。

自然伝承は自然と民俗という形でとらえることも可能であり、筆者も自然と係わった地区住民の生活意識を基底において考察を進めてきたのである。



図6 手取溪谷には川の危険を訴えるミズシの伝承が残されている

猿鑑(鏡)の周辺景観

自然伝承の地域差 (まとめにかえて)

本論では、アニマル・ロアの伝承の実態を鳥越地区と下吉野地区の両地区において、収録したインフォーマントからの聞き取りを中心としてとりあげて論じたのであるが、前者は鳥越地区における現代の環境の中に生息する動物をめぐる評価のなかで考えられ、認識されたアニマル・ロアであるのに比して後者は80歳以上の高齢者の継承であって、インフォーマントにとっては昔話そのものであって、現在の自然環境を念頭においているものではない。だが、キツネ、ダイジャ、テングなどの出没した自然環境が口承者自身の記録からも、決して伝承と無縁でないことを述べている点は注目されねばならない。すなわち、現環境は、大きく変化をきたしてはいるが過去において、伝承の発生をみるにふさわしい場所であったと認識されていたのである。そして、下吉野ではイヌの声は恐れられ、イヌがいやがられていたというインフォーマントの証言も、さらに考察をすすめねばならぬ問題であると考えている。都市化社会の中で、今日イヌの評価は様々な論争を呼び、野良犬の管理は行政問題でもある。地域社会の近代化のなかで、動物たちが歴史評価をうけつつある現状のなかで、下吉野地

区の古伝承にあらわれる動物たちの住民による認識・評価はさらに各種動物に求められるのである。

1989年下吉野においては、キツネによるトウモロコシ害が発生し、住民の一部ではあるが古くからの動物退治（撃退）の習俗が復活した。再びキツネはやっかいな動物となってきたのである。野生との共存や動物保護の声の高まるなかで、忘れ去られた筈のやり方で地区住民は赤と白の布を交互につけたロープをはりめぐらしたのである（図7）。

本論は鳥越村在住の多くの元教員であるインフォーマントそして、共同研究者でもある同村教育委員会の藤田喜作氏をはじめとする多くの方々のお力添えをえた。また、下吉野亀寿会所属の高齢者の方々から多大な情報の提供をえた。インフォーマントとして記述したが、中野なつ、辻つね、吉村茂、中林すみ子、中川ひさ、北出千代、北出一男、太田はつ、辻武松、山本重孝、山本千代、黒川みよ、山田さき、山岸愛子の各氏のご協力と御教示に深甚の感謝を申し上げることをお許し願いたい。また、本論は白山自然保護センター調査研究費の支援をうけた。ここに記して謝辞を呈したい。



図7 下吉野地区のキツネ撃退の習俗
トウモロコシ畠への侵入を防ぐ白と赤の布
(山本重孝氏提供)

文 献

- 広瀬鎮・水野礼子（1975）白山麓のニホンザル伝承・薬に使ったサル。はくさん、第1巻第3号
- 広瀬鎮（1981）中宮（石川県・吉野谷村）におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷。石川県白山自然保護センター研究報告、第7集、p.48-52.
- 広瀬鎮（1986）ニホンザル伝承と白山麓吉野谷村下吉野にみられた地域住民間の自然動物観。石川県白山自然保護センター研究報告、第11集、p.110-115.
- 広瀬鎮（1986）石川県石川郡鳥越村にみられる哺乳動物と住民生活の自然史—左隣の人びと—。石川県白山自然保護センター研究報告、第13集、p.79-84.
- 広瀬鎮（1988）石川県石川郡手取川流域村落にみられた住民の自然認識(1)。石川県白山自然保護センター研究報告、第15集、p.117-128.
- 広瀬鎮（1988）中部山村社会における猿の民俗(3)—白山鳥越村にみられる自然観と環境認識（下吉野・上吉野・三ツ屋野・河原山）—。名古屋学院力学論集、val.25. No.1, p.1-44.
- 広瀬鎮（1988）中部山村社会における猿の民俗(4)—白山麓鳥越村近代化にともなう住民の自然観変化—。名古屋学院大学研究年報、p.314-360.
- 石川県白山自然保護センター（1988）白山麓自然環境活用調査報告書。石川県
- 吉野谷村物語編集委員会（1984）吉野谷村物語、p.11-16.
- 吉野亀寿会（1987）昭和62年度地名の調査確認と地名の由緒・伝承の集録。下吉野地区、p.1-68.

Summary

Authors collected animal lores in Hakusan Mountain Foot Region and are analyzing different regional and traditional messages from informants. we could collect attractive animal lores of

several parts of Torigoe-mura village through educators in five years.

As the result, we found each different characteristics among informants talks. One of characteristics is depend on resource culture and the other is depend on the mind of traditional taboo and spiritual culture.

In Shimoyoshino willage there are remaining traditional lore paterns, even now.